

（二七八九—一八〇）九条家の離れとして建立し、主に茶会や歌会に使用されたものとみられ、往時の貴族の風流をしのばせる貴重な遺構である。

また庭園（江戸）は「勾玉池」を中心とした廻遊式庭園とし、東方池辺には滝口を設け、池中に岬を交互に突き出し、池泉に変化を与えている。今は池の中央の反橋によって東西に切断され、大いに感興をそがれているが、中世末期の作庭手法を随所にみせていて、近世の公家屋敷の庭園を知る上で貴重な実例の one となっている。

〔蔵島神社〕は旧九条家の池の中島にあるも同家の鎮守社である。平清盛が母祇園女御のために安芸の蔵島神を勧請したのが起りといわれ、はじめ兵庫の築島にあったが、のちにここへ移したとつたえ、祇園女御を配祀する。社前の石鳥居（重美・室町）は小型ではあるが、笠木と島木がともに唐破風になっているのが珍しく、京都三珍鳥居の一とされている。

〔宗像神社〕は九条家址の西北、築地塀をめぐらせた一画内にある。もとは花山院家の鎮守社で、宗像三神と倉稲魂神・天石戸開神を祀る。

はじめ左大臣藤原冬嗣が、下京の東西両市の守護神として宗像神を勧請したのが起りであるが、またこの地にあった自邸の小一条院にも勧請したともいう。花山院はこの小一条院の東にあった貞保親王（清和帝皇子）の邸宅であったが、のちに藤原氏が領有し、両院を合せて花山院と号するに至った。

樹木の生い茂る境内には、ささやかな本殿および末社、社務所等があり、東南隅には樹齡六百年といわれる苑内第一の巨木「くす」の木がある。

〔旧閑院宮邸〕は九条家址の西にある。平屋建の本御殿と長屋門・馬小屋・使用人控室・物置等があり、江戸時代の公家建築の一端を知る上で貴重な遺構である。現在、本御殿は京都

御苑保存協会の事務所となり、邸内の一隅には環境庁の御苑管理事務所がある。

〔白雲神社〕は右同所より北へ三〇〇メートル、建礼門に至る苑道の東側にあって、市杵島姫命を祭神とする西園寺家の旧鎮守社である。

はじめ妙音天といい、もとは西園寺公経が造営した衣笠山麓の北山殿内妙音堂に祀られていたが、明和六年（一七六九）前内大臣西園寺公晃によってこの地に勧請再興された。明治維新に屋敷はとり払われ、白雲神社と改めて鎮守社だけが残った。今は「御所の弁天さん」として市民の崇敬をあつめている。

琵琶の道につきていささか憂ふる事侍りける祈り申さむため、妙音

堂へ参りける折ふし、雪深く降りて侍りければ

音絶えてむせぶ道には悩むとも埋れなはてぞ雪の下木（玉葉集、巻十四、雑歌一）

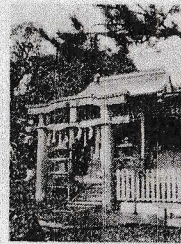
入道前太政大臣

〔蛤御門〕は京都御苑の西側、烏丸通下長者町上ルところに面する門をいう。もとは新在家御門といい、今のところより苑内北側に南面していた。この門はいつも閉ざされていたが、天明八年（一七八八）の大火によって開門されたので、「焼けて口あく蛤」にたとえて蛤御門とよばれるに至った。

この門をいちやく有名ならしめたのは、元治元年（一八六四）七月十九日、長州藩兵と御所九門を固めていた会津・薩摩を主力とする藩兵とのあいだに起った「禁門の戦」（元治甲子の役）中、とくに蛤御門を中心としての戦いがもっとも激烈をきわめ、一に「蛤御門の戦」とよばれたからである。今もお門柱に弾痕をとどめている。

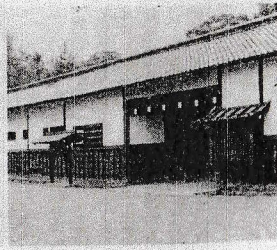
なお蛤御門を入った苑内玉砂利道の中央にある一本の樟の大樹は、長州藩士来島又兵衛が

一 高倉橋という。建礼門前の道路を御苑の南端にまで通じているようにみえるため、明治初年に造られた擬宝珠・欄干付の木造橋。



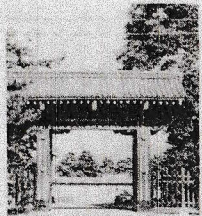
蔵島神社

二 社伝によれば、この石鳥居も兵庫の築島にあったが、足利將軍義晴が上洛の際、細川高国邸内に移した。その後、明和八年（一七七二）九条道前公が徳川幕府に乞うて移したとつたえる。



旧閑院宮邸を本門

一 西園寺実寒、後西園寺入道前太政大臣。元亨二年（一二三二）没、年七十四。この歌は北山殿内にあった頃の妙音堂をうたった歌。出町の妙音堂ではない。



蛤御門